

Ⅱ. ハイリスク胎児の産科管理に関する研究

分担研究報告書

名古屋市立大学

八 神 喜 昭

胎児の生存と正常な発育を脅かし、流産や奇形発生に至らしめる原因としての環境因子に関しては、未解決な点があまりに多い。なかでも胎児死亡を繰り返す反復流産の原因はまだ一部が解明されたのみであるところから、反復流産の背景因子に関する信頼度の高い疫学的調査は、原因解明の端緒として重要であり、流産の診断、予後判定に関して目覚ましい医療技術の進歩のみられた現時点で改めて再検討を加えることの意義は深い。

さらに、反復流産に対する免疫学的手法を応用した新しい治療法は、優れた治療効果が期待できることから、より厳正な治療効果の評価と、治療の胎児への影響の長期的な検討がされねばならない。

胎児の形態的、機能的異常に対する治療もまた全く新しい分野の医療であるため、倫理面を充分加味した安全性の高い基礎的な技術開発と同時に治療法の確立が重要な課題である。

A. 反復流産の疫学的調査

昭和61年度に実施した反復流産の疫学に関する予備調査結果に基き、反復流産の背景因子をさらに詳細に解析する目的で、調査用紙を新たに作製した。調査対象は、第一年度と同一症例とし、調査機関数を拡大して症例の収集に努め、研究協力者の所属する15施設より回答の協力を得た。

後方観察的検討では、2回以上の反復流産例では、次回妊娠時における妊孕力の著しい低下が示唆されたが、最終妊娠が流産以外の症例を的確に網羅して検討する必要性が明らかとなった。

一方、二年間に登録された二回以上連続の反復流産例の前方観察的調査を継続することにより、反復流産の次回妊娠における流産リスク評価の可能性が示唆された。

B. 反復流産の治療に関する研究

原因不明反復流産に対する免疫療法について前年度に引き続き、参加4施設における成績について検討を行った。免疫療法の対象となったものは計379例で昨年度の報告より99名の増加がみられた。

治療方法は施設により若干異なるも、夫リンパ球投与による副作用は全く認められなかった。

治療成績は、連続3回以上流産を繰り返した原発性習慣流産患者について生児出産数/妊娠数をみると122/164(75%)となり満足すべき結果を得ている。

尚、出産児についての調査では165例中7例(4.2%)にSFDがみられ、2例に妊娠後期胎児死亡が認められたが、治療による影響とは考え難いが、今後の詳細な検討が必要と考えられる。

出生後の発育については今回追跡調査し得た症例では特別な異常を認めていないが、症例数を増し検討を続けて行く予定である。

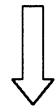
C. ハイリスク胎児の治療法開発に関する研究

昨年度に引き続き胎児治療の現況についての調査を行った。調査機関は胎児治療に深い関心を持つ本研究の構成メンバーを対象とし、最近2年間の出生前診断および治療の現状と結果について調査を実施した。その結果、胎児異常のうち胎児治療の対象疾患の現況を明らかにすることが出来た。すなわち、今後積極的に胎児治療の対象となり得る異常は、胎児心不全やビタミン欠乏などの内科的治療と、血液型不適合妊娠に対する胎児輸血、水腎症、水頭症、横隔膜ヘルニアの外科的治療および、胎児水腫であることがこの調査により裏付けられた。さらに、子宮内胎児治療の基礎的研究として、①胎児血液所見に関する研究 ②胎児水腫の原因・発生時による予後 ③胎児水腫における胸膜水穿刺の意義 ④胎児免疫能に関する研究が行われた。これらの基礎的研究により胎児の生理・病態を把握することは、個々の異常に対応した治療法の開発、確立に寄与するものと考えられる。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



胎児の生存と正常な発育を脅かし、流産や奇形発生に至らしめる原因としての環境因子に関しては、未解決な点があまりにも多い。なかでも胎児死亡を繰り返す反復流産の原因はまだ一部が解明されたのみであるところから、反復流産の背景因子に関する信頼度の高い疫学的調査は、原因解明の端緒として重要であり、流産の診断、予後判定に関して目覚ましい医療技術の進歩のみられた現時点で改めて再検討を加えることの意義は深い。

さらに、反復流産に対する免疫学的手法を応用した新しい治療法は、優れた治療効果が期待できることから、より厳正な治療効果の評価と、治療の胎児への影響の長期的な検討がされねばならない。

胎児の形態的、機能的異常に対する治療もまた全く新しい分野の医療であるため、倫理面を充分加味した安全性の高い基礎的な技術開発と同時に治療法の確立が重要な課題である。